BUDŌ NEWS

今月のニュース

第 62 回全日本女子剣道選手権大会

第62回全日本女子剣道選手権大会

渡邊タイ（熊本）が悲願の初優勝

決勝戦＝渡邊（右）が延長戦で小手を決める

決勝戦を終え、笑顔で挨拶を交わす渡邊（左）と妹尾

第62回全日本女子剣道選手権大会（主催＝全日本剣道連盟）が9月3日、奈良県橿原市のジェイテクトアリーナ奈良で開催された。

大会には各都道府県予選で選出された63名と前年度優勝者1名の合計64名が出場し、女子剣道日本一の座をめぐって激戦を繰り広げた。

決勝戦は熊本県代表の渡邊タイ（熊本・熊本県警）と福岡県代表の妹尾舞香（福岡・福岡県警）が対戦。延長戦で渡邊が小手を決め、初の優勝を手中に収めた。

試合はトーナメント方式で実施された。試合時間は5分の3本勝負で、時間内に勝敗が決しない場合は3分区切りの延長戦を行い、一本を先取した方を勝者とした。

1回戦～準々決勝

■第1ブロック

1回戦、前年度優勝の末永真理（和歌山・一般社団法人み・ゆーじ）と表ちさと（東京・警視庁）が対戦。末永は、上段に構える表の左小手を狙うが、待ち構えた表が小手抜き面で先制。後がなくなった末永は、軽快な足さばきから鋭い左小手を決める。一対一で迎えた延長戦、表の片手面に末永が出ばな小手を合わせ、勝利。さらに末永は、3回戦で上段の宮沢彩夏（埼玉・埼玉県警）と対戦し、一本を奪われるも二本勝ちで辛勝。2人の上段に苦戦しながらも、準々決勝に進出した。

同じく準々決勝に勝ち上がったのは、今大会で9回目の出場となる渡邊タイ。現在行われている日本代表候補合宿のキャプテンを務める渡邊と、前キャプテンの末永による、新旧キャプテン対決が実現した。実力伯仲の両者の試合は、有効打のないまま延長戦へ。延長戦終盤、攻め合いの中から末永が逆胴を打つ。不十分とみなされたその瞬間、渡邊が豪快に飛び込み面を放ち、一本勝ち。渡邊は4年ぶりの準決勝に駒を進め、前年度覇者の末永はベスト8で姿を消した。

第1ブロック・準々決勝＝末永の逆胴が不十分となった一瞬の隙を、渡邊（奥）が面で捉える

■第2ブロック

今大会で10回目の出場となる松本弥月（神奈川・神奈川県警）は3回戦で、全日本学生チャンピオンの経歴を持つ小松加奈（宮城・石巻市釜小教員）と対決。強豪同士の試合は3回目の延長戦へ突入。小松が技を繰り出そうとした隙を、松本が鋭い連続技で攻め込み、最後は飛び込み面を決め、準々決勝へ進出した。

準々決勝は松本と横山万優（大阪・大阪府警※旧姓玉置）の対決。横山は2回目の出場ながら準々決勝まで勝ち上がった。延長戦に入り、松本が左小手を打とうとする出ばなを、横山が片手面で捉え、一本勝ち。ベテランの松本を制した横山が、初

第2ブロック・準々決勝＝横山（右）対松本。鋭い技と攻めで互いにけん制し合い、勝負は延長戦にもつれ込んだ

の準決勝進出を果たした。

■第3ブロック

前年度3位入賞の近藤美洸（東京・警視庁※旧姓阿部）と、全日本学生選手権で3年連続入賞している笠日向子（茨城・筑波大3年）が3回戦で対決。試合は3回の延長戦でも決着がつかず、5分間の休憩を挟み、4回目の延長戦に突入。笠が面を打とうと手元を上げたところに、近藤の出ばな小手が決まり、一本。

第3ブロック・準々決勝＝延長戦で近藤（右）が小手を決める

準々決勝に進出した。

準々決勝は近藤と水川晴奈（岡山・法政大3年）が対戦。2回目の延長戦、水川のわずかに上がった手元に、近藤が鋭く小手を打つ。近藤の小手の瞬間に水川も面を打ったが、近藤に旗2本、水川に旗1本が上がり、近藤が勝利。2年連続の準決勝進出を決めた。

■第4ブロック

3回戦、前年度準優勝の妹尾舞香と、過去に選手権大会を連覇している高橋萌子（神奈川・神奈川県警）が相見（まみ）える。高橋が多彩な攻めと技を繰り出し、妹尾が出ばなや打突後を狙う展開が続く。隙のない両者の試合は、4回目の延長戦に突入する。延長戦が終了する間際、妹尾が素早く間合いを詰め、じりじりと攻め込みながら飛び込み面を放つと見事に決まり、一本。準々決勝に進出した。

準々決勝で妹尾は、平成30年に本大会で準優勝に入賞している佐藤みのり（東京・警視庁）と対戦。延長戦で妹尾が近い間合いからの面を決め、準決勝に進出した。

第4ブロック・3回戦＝4回目の延長戦で妹尾（奥）が高橋に面を決める

◎大会最年少出場者＝村田結依選手（茨城・守谷高校3年）

今年3月の全国高等学校選抜大会にて、大将としてチームの優勝に貢献した村田選手が全日本選手権の舞台に立った。1回戦、全日本学生覇者の経歴を持つ小川萌々香選手（愛知・愛知県警）を二本勝ちで下す大金星を挙げた。その後、2回戦で藤﨑薫子選手（大阪・大阪府警）と対戦し、延長までもつれ込むも、胴を決められ惜しくも敗退した。

▽村田選手コメント

「周りがスター選手ばかりで緊張していたんですけど、もう全部出し切って楽しもうと思って臨みました。来年は今年の結果よりも上に行けるように、また予選から頑張ります」

第1ブロック・2回戦＝村田（奥）対藤﨑

準決勝①

渡邊タイ　コメー　　横山万優

渡邊の鋭い攻めに、横山が構えを崩される展開が続く。中盤戦、両者が鍔競り合いから分かれ、横山が上段に構えたところに、渡邊が左小手を決める。その後、横山は積極的に攻め、技を繰り出し巻き返しを図るも、渡邊は落ち着いて横山をいなす。横山の攻撃の手が緩んだ瞬間、渡邊が攻め込み、上段の構えが崩れたところに面を決め、渡邊が二本勝ち。初の決勝に進出した。

渡邊（手前）が左小手を決める

▽第3位＝横山万優選手

「人生で初めて全日本クラスの個人戦で3位という結果を残せて嬉しく思っています。今日のこの結果は、日々稽古をしてくださる大阪府警の師範の先生方、先輩、同期のおかげだと思っています。（今後の抱負について）まずは10月の警察優勝大会（団体戦）の連覇を成し遂げたいです。また、来年もこの大会に出場して、今年よりもいい結果を残せるように頑張ります」

準決勝②

妹尾舞香　　メー　　近藤美洸

準決勝2試合目は、奇しくも前年度大会と同じ組み合わせとなった。リベンジを果たしたい近藤と、2年ぶりの優勝を目指す妹尾が1年ぶりに相見える。両者の試合は、慎重な攻め合いで一本の機会を窺う展開が続く。互いに有効打を打てないまま2回目の延長戦に突入。開始直後、小刻みに間合いを詰めた妹尾が、狙い澄ました飛び込み面を決め、一本。2年連続の決勝進出を決めた。

妹尾（左）が延長戦で飛び込み面を決める

▽第3位＝近藤美洸選手

「今日は1回戦から良い調子で、試合内容もまとまっていた気がします。（準決勝は）去年と同じく妹尾選手との試合だったので、『ここが勝負だ』と思い試合に臨んだのですが、最後はしっかりといい技をもらってしまいました。また来年も全日本に出場して優勝を目指したいですし、来年開催される世界選手権についてもまだ選ばれたことがないので、出場できるように精進していきたいです」

妹尾（左）が防御を解いた瞬間、渡邊が引き小手を放ち、優勝の一本を決めた

決勝

渡邊タイ　コー　妹尾舞香

9回目の出場で初の決勝の舞台に上がる渡邊と、2年ぶりの優勝に王手をかける妹尾が対決。積極的に技を繰り出す渡邊に対し、妹尾は泰然とした構えから虎視眈々と一撃を狙う。互いに有効打を決めきれず、試合は延長戦に突入し、なおも一進一退の攻防が続く。攻め合いの中、互いに防御しながら近い間合いに入り、鍔競り合いになる直前、渡邊が素早く退がりながら引き小手を打つ。渡邊の打突はしっかりと妹尾の小手筒を捉え、一本。渡邊が念願の優勝を手中に収めた。

妹尾（右）が飛び込み面を打つも、渡邊が竹刀で防ぐ

▽準優勝＝妹尾舞香選手

「また決勝で負けてしまいました。今年は1回戦からチャレンジャー精神で試合をしました。捨て切った飛び込み面なども決まっていたので、去年より良い状態で決勝に臨めたと思っていたのですが、去年と同じようなところを取られてしまったので、まだまだ修行が足りないなと思いました。（渡邊選手について）よく相談に乗ってくれる、とてもお世話になっている先輩です。もっと強くなって、ぜひリベンジしたいです」

心技体 人を育てる総合誌
月刊 武道

日本代表キャプテンとして譲れない優勝

◉優勝＝渡邊タイ・六段（熊本県警）

渡邊タイ
（わたなべ・たい）

1992年生まれ、熊本県出身。小学校1年生から剣道を始め、地元の県立阿蘇高校から日本体育大学へ進学し、卒業後熊本県警へ奉職。

2017年、`19年全日本選手権3位。`15年、`18年世界剣道選手権大会出場、2度の団体優勝に貢献。`19年全国警察剣道選手権大会（個人戦）優勝。

9回目の出場で初優勝に輝いた渡邊選手の顔には、満面の笑顔が浮かんだ。

「やっと優勝できました。決勝戦は、最後の試合と思わないで、1回戦ぐらいの気持ちで、最後まで戦かってやろうと思っていました」

――決勝で決めた小手は狙っていましたか。

「中間の間合いでの小手だったと思うんですけど、無意識の技だったので、あまり詳しく覚えてないです」

――今日、先に一本を取られた試合（2回戦）がありました。

「いつもだったら、慌てて打ちに行ってしまうところなんですけど、今日はまだ時間があるから、チャンスを狙って絶対取り返そうと思いながら試合をしました。今思えば、冷静な判断ができたかなと思います」

――今回、日本代表候補の強化合宿でキャプテンに選ばれましたが、心境の変化などはありましたか。

「私は、全日本選手権を優勝せずにキャプテンになったので、全日本の女子メンバーを引っ張っていく上では、何としてでもこの選手権を取りたいという気持ちが自分の中に強くあって、絶対に譲れないところだったので、必ず優勝するという気持ちで戦い抜きました」

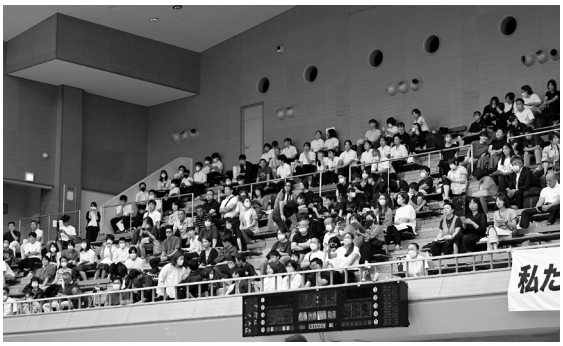
――準々決勝で試合した末永選手とは、代表選手として普段から交流もあると思いますが、どのような気持ちで試合をしましたか。

「今回の合宿にはもちろん真理子（末永選手の旧名）先輩も入っているのですが、私がキャプテンを務める上でとても心強い先輩であり、当然試合も強いので、今日は本当に胸を借りる気持ちで挑戦しました。（延長戦で決めた面について）勝手に手が出ました。逆胴を触られた感触はあったのですが、やっぱり打った後は狙いどころなので、無意識に打ちに行きました」

――新旧キャプテンの対決は本当に激戦でしたね。

「そうですね。ただ、どのブロックでも大変な試合だったと思います。最初から最後まで自分の剣道ができたのはよかったと思います」

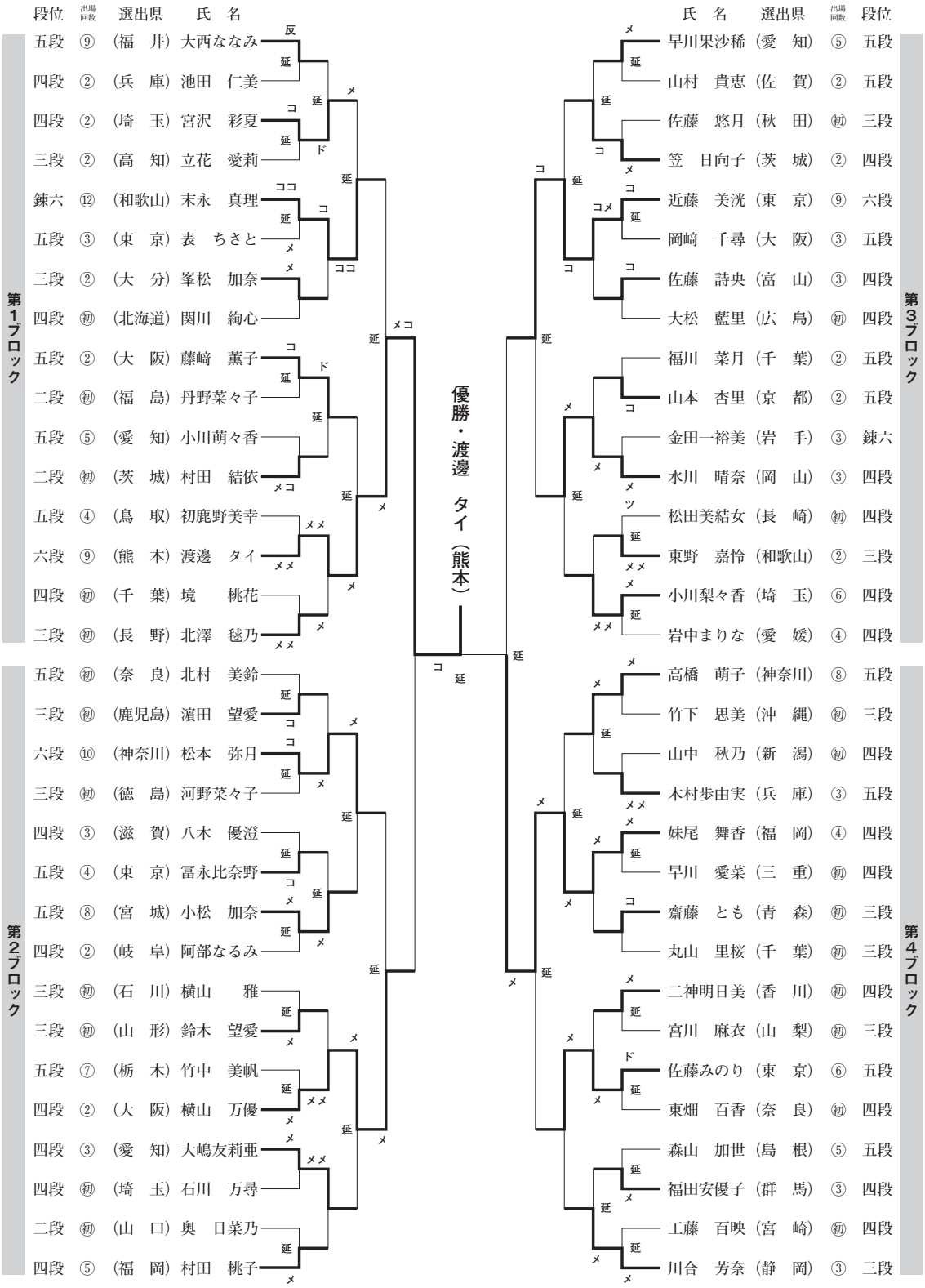
来年、6年ぶりの世界選手権大会がイタリアで開催される。渡邊選手の活躍に注目が集まる。



選手の応援に、多くの観客が全国から駆けつけた

公開演武「日本剣道形」
打太刀・鎌塚いづみ（教士七段）、仕太刀・中本利子（教士七段）

第62回全日本女子剣道選手権大会



第57回和道会全国空手道競技大会

組手団体戦 一般男子 白水修養会が悲願の初優勝

組手団体戦 大学生男子 明治大学が７連覇達成

組手団体戦（一般男子の部）・決勝中堅戦＝白水修養会・荒川雅俊（右）が上段突きで攻める

第57回和道会全国空手道競技大会（主催＝全日本空手道連盟和道会）が、８月26日に浦安市運動公園総合体育館コート（千葉県浦安市）で、翌27日には日本武道館で、２日間にわたって開催された。２日目には試合のほか、少年錬成や団体形演武が行われた。大会には小学１年生からシニアまで幅広い年齢層の選手が出場し、組手競技と形競技の全42部門で熱戦が繰り広げられた。

■組手団体戦

▼一般男子の部（５人制）

11チームが参加。決勝は前回３位の白水修養会と春日道場刈谷空手倶楽部が対戦。先鋒・次鋒戦ともに白水修養会が連勝し迎えた中堅戦。組手個人戦・一般男子有段の部で優勝を決めた白水修養会・荒川雅俊と春日道場刈谷空手倶楽部・川崎晃太郎が対戦した。試合序盤から荒川が素早い突きで攻め続け、優位に立つ。反撃に出たい川崎であったが、終始荒川ペースのままで試合は終了。白水修養会が３―０で悲願の初優勝に輝いた。

組手団体戦（大学生男子の部）・決勝先鋒戦＝
明治大学・海野陽乃汰（左）の上段突きが決まる

組手団体戦（都道府県対抗戦）・決勝先鋒戦＝
埼玉県・枝久保陽（左）が中段突きを決める

◎優勝＝白水修養会・荒川尊祐監督

「これまで上位3位には入ったこともありましたが、優勝は果たせていなかったので、大変嬉しいです。チームを引っ張ってくれた社会人のメンバーに感謝です。来年連覇できるように頑張ります」

◎優勝＝白水修養会

主将・岩崎拓也選手

「ずっとチーム全体で全国で優勝するという目標を掲げて達成できていなかったので、非常に嬉しいです。来年連覇できるようにしっかり練習を頑張っていきます」

▼大学生男子の部（5人制）

11チームが出場。決勝戦は本大会6連覇中の明治大学と立教大学が対戦。今年3月に立教大学が優勝した関東大会の決勝戦と同じ顔合わせとなった。先鋒・次鋒戦ともに明治大学が勝利し、迎えた中堅戦は、組手個人戦・大学生男子有段の部で優勝を決めた明治大学・春原駿貴と立教大学・髙橋優斗の対戦。春原が突きで攻め続けポイントを重ね、優位に試合を進める。髙橋は中盤から終盤にかけて徐々に反撃。髙橋が中段蹴りで技有りを奪うと、試合終盤に突きを決めて両者のポイントが並んだ。副将戦にもつれ込むかと思われたが、土壇場で春原が有効をとり、試合終了。関東大会での雪辱を果たした。3―0で明治大学が優勝を決め、7連覇を成し遂げた。

◎優勝＝明治大学

主将・出羽遼太郎選手

「7連覇の重圧もありましたが、それ以前に関東大会で立教大学には負けているので、チャレンジャーの気持ちで決勝戦に臨みました。ほっとひと息です」

▼都道府県対抗戦

10チームが参加。都道府県対抗戦の決勝は、第55回大会で優勝した埼玉県と静岡県の対戦。試合は副将戦で埼玉県が3勝目を決め、3―1で優勝に輝いた。

◎優勝＝埼玉県・荒川尊祐監督

「5人のメンバーに対して感謝の気持ちでいっぱいです。それぞれ違う道場から集まって、みんなの力を一つにまとめて、その力を発揮できたことが優勝に繋がったと思います。監督として嬉しいです」

組手個人戦・小学６年生女子の部
優勝＝洞崎珠羽（左・美濃）

形個人戦・一般男子有段の部
優勝＝伊藤瑠威（錬成館）・ワンシュウ

組手個人戦・一般女子有段の部
優勝＝松村亜来（左・熊本県本部）

■組手個人戦

▼一般女子有段の部

29名が出場。決勝には熊本県本部・松村亜来と立教大学・福元結衣子が勝ち進んだ。試合序盤は松村がポイントを奪い、福元が追いかける展開。一進一退の攻防が続いたが、徐々に松村がポイント差を広げて勝利。松村が優勝に輝いた。

◎優勝＝松村亜来選手（熊本県本部）

「優勝できて嬉しいです。最近、優勝から遠ざかっていたので、全国大会で優勝できて自分の成長が結果に現れてよかったなと安心しました」

▼小学6年生女子の部

39名が出場。決勝には美濃・洞崎珠羽と名取・佐々木悠夏が勝ち進んだ。終始、攻め続けポイントを重ねた洞崎が勝利し、優勝に輝いた。

◎優勝＝洞崎珠羽選手（美濃）

「最近優勝できていませんでしたが、周りの人たちの助けがあり、ここまでこれたと思っています。すごく嬉しいです。和道会の全国大会で優勝できたので、次は（他流派との）全国大会優勝目指して頑張ります」

■形個人戦

▼一般男子有段の部

31名が出場。決勝には錬成館・伊藤瑠威と嶽空塾・石井泰地が勝ち進んだ。決勝では、両者ともにワンシュウを演武、キレのある動きで観客の心を掴（つか）んだ。判定は3―2の僅差で伊藤が5年ぶり2度目の優勝に輝いた。

▼一般女子有段の部

21名が出場。決勝には連覇がかかる昇政塾・大野美桜と小牧・畠中ほのかが勝ち進んだ。決勝では両者ともにチントウを演武。判定は5―0の審判団全員一致で大野が勝利。完璧な形で大野が連覇を成し遂げた。

心技体 人を育てる総合誌
月刊 武道

大道場いっぱいに広がり行われた少年錬成

形個人戦・一般女子有段の部
優勝＝大野美桜（昇政塾）・チントウ

少年錬成終了後、団体形演武が披露された

【大会結果】※優勝のみ

《組手団体戦》

▽**都道府県対抗**＝埼玉県▽**一般男子**＝白水修養会▽**大学生男子**＝明治大学▽**一般女子**＝町田誠空会▽**少年男子**＝美濃

《組手個人戦》

▽**シニア男子50歳以上**＝南保生明（明空義塾札幌）▽**シニア男子40歳以上**＝渡邊拓也（明治大学駿台空手会）▽**シニア女子40歳以上**＝古橋富子（名空会瀬戸）▽**一般男子有段**＝荒川雅俊（白水修養会）▽**大学生男子有段**＝春原駿貴（明治大学）▽**一般男子有級**＝川島碁和萌（越谷修道館）▽**一般女子有段**＝松村亜来（熊本県本部）▽**一般女子有級**＝渡邉心結（國學院大學）▽**少年男子**＝中村緋彩（熊本県本部）▽**少年女子**＝荒木柚乃（水風会江南）▽**中学男子**＝飯島楓斗（明空義塾札幌）▽**中学女子**＝西村まりあ（美濃）▽**小学6年男子**＝五十嵐悠仁（明空義塾札幌）▽**小学6年女子**＝洞崎珠羽（美濃）▽**小学5年男子**＝野平渓太（美濃）▽**小学5年女子**＝山崎綾夏（美濃）▽**小学4年男子**＝野田奏（錬成館尾西）▽**小学4年女子**＝神谷凌帆（美濃）▽**小学3年男女**＝石原来望（美濃）▽**小学2年男女**＝後藤竜宜（美濃）▽**小学1年男女**＝板橋弥成（名取）

《形個人戦》

▽**シニア男子40歳以上**＝平和也（長瀞）▽**シニア女子40歳以上**＝加子倫子（杉浦錬成塾自清会）▽**一般男子有段**＝伊藤瑠威（錬成館）▽**一般男子有級**＝北郷諒（早稲田大学誠心会）▽**一般女子有段**＝大野美桜（昇政塾）▽**一般女子有級**＝宇野結子（早稲田大学誠心会）▽**少年男子**＝菊池奏楽（明空義塾）▽**少年女子**＝吉野菜々子（茂原）▽**中学男子**＝平野煌丈（知空会知立）▽**中学女子**＝室伏優衣（岐東）▽**小学6年男女**＝冨澤墨（奥町道場）▽**小学5年男女**＝林直穂（城志館）▽**小学4年男女**＝大中莉子（俊和会本部）▽**小学3年男女**＝今井仁菜（岐東）▽**小学2年男女**＝砂川結衣（昇政塾）▽**小学1年男女**＝籾井周一朗（津）

日本武道学会第 56 回大会

本部企画
シンポジウム

多様「性」と武道を考える

左から司会の小田氏と松井氏、登壇者の野口氏と松宮氏（本部企画「シンポジウム」）

日本武道学会第56回大会は９月４・５日、大阪府柏原市の大阪教育大学で国際武道・格闘技科学学会（IMACSSS、以下アイマックス）と共催で開催された。

初日にはアイマックスのW．J．シナルスキー会長による「ヨーロッパの武道研究事業」と題した基調講演と「多様『性』と武道」のシンポジウムが実施された。２日目には本年度総会と剣道、弓道・なぎなた、少林寺拳法、障害者武道と空手道の各専門分科会が行われた。弓道となぎなたは合同、少林寺拳法は初の開催となった。

また、２日間を通して人文・社会科学系、自然科学系、武道指導法系、ポスター発表の４分野に分かれて実施された一般研究発表に加えて、国際セッションがオンデマンド形式で配信された。

初日（９月４日）の午後１時から大阪教育大学の岡本幾子学長が挨拶を述べて、基調講演に移った。

■基調講演

◎講師　W．J．シナルスキー氏（アイマックス会長）

テーマ「ヨーロッパの武道の現状と動向」

武道は世界各国の学術会によって研究されています。ヨーロッパの中では特にポーランドで活発に研究されています。しかしながら、ヨーロッパの視点からの研究論文は非常に少ないのが現状です。これから三つのことを紹介します。

一つ目は、ヨーロッパのマーシャルアーツ研究方法の現状です。

ヨーロッパではさまざまな理論的アプローチをしていますが、科学的な枠組みが定義されていないものもあります。これらの学問分野では、一般的に受け入れられている規範やパラダイムに基づく研究となっています。人文・社会科学系のアプローチ、自然科学系のアプローチなどありますが、近年は複合的なアプローチが最も有効であるとされています。実証研究は主にスポーツ科学などに関連し、この場合、マーシャルアーツは他のスポーツ分野と同様に

研究されています。トレーニングや格闘技理論などの研究は格闘技におけるトレーニングプロセスの効果を高めることが期待されており、盛んに行われています。逆に古流武術などは文化的背景や心理的側面が重要であり、それぞれ異なるアプローチを使っています。

二つ目は、ヨーロッパのマーシャルアーツ研究対象の動向です。研究対象はアジアの武術、またはアジアの武術から発展した新しい武術です。その他、ヨーロッパの格闘技も研究対象になっていますが、コンバットスポーツの場合、競技で成果が出るものが対象となります。アジア系の武術の研究については、オリンピック種目である柔道に関する論文が一番多く、ヨーロッパにおける日本武道の歴史などさまざまな研究があります。最近では武道ツーリズムに関する研究やマーシャルアーツとジェンダーなどの近年の社会的なトレンドと結びつけるものも出てきています。

三つ目は、活動している学術機関の詳細です。ヨーロッパは武術専門誌が少なく、廃刊になるものもあります。また、商業的な学術誌に掲載するとなると多額の掲載料も発生します。武道専門誌だけでなく、学術ジャーナルなどでも武道に関する研究論文を掲載しています。

また、アイマックスで毎年、学術大会を行っており、それに基づいた研究論文を出版しています。これは西欧における武術の発展に役に立っていると確信しています。

Number	Name of journal	Country of publishing	Published since	Indexation / Impact factor
1	Ido Movement for Culture. Journal of Martial Arts Anthropology	Poland	2000-	Scopus, Web of Science / **IF: 1.0**
2	Archives of Budo	Poland	2005-	Scopus, Web of Science / **IF: 2.1**
3	Revista de Artes Marciales Asiáticas	Spain	2006-	Scopus, Web of Science / no IF
4	Martial Arts Studies	Wales / UK	2015-	no data / not indexed
5	Journal of Combat Sports and Martial Arts	Poland	2009-2017	no data / no longer operating

[Source: the author's own research]

ヨーロッパの武道について基調講演を行うシナルスキー氏

■本部企画「シンポジウム」

テーマ「多様『性』と武道」

司会を小田佳子氏（法政大学）と松井崇氏（筑波大学）が務め、野口亜弥氏（成城大学専任講師）と松宮智生氏（清和大学准教授）が登壇した。まずシンポジストの野口氏と松宮氏がそれぞれ発表を行ったあと、小田氏と松井氏によって参加者との質疑応答・意見交換が行われた。

▼野口亜弥氏

「体育・スポーツ現場での性に関する課題は近代スポーツの発祥の頃に遡る。スポーツ文化は障害がない、異性愛のシスジェンダー男性を中心に拡大してきた。その中で、女性が平等な機会を求めてきた歴史があり、これまで男性優位主義・異性愛主義のジェンダー二元論が絶えず再生産され続けていた。

体育・スポーツ現場でＬＧＢＴＱ＋の当事者が抱える課題は二つに分類される。『差別・偏見・嫌悪』に関する課題と『制度・仕組み』に関する課題だ。『差別・偏見・嫌悪』では、同性愛に関する不快な発言や、異性愛を当然、正常とする雰囲気が体育・スポーツの現場では見られる。『制度・仕組み』の課題は、ユニフォームや水着が性別で分けられていることへの抵抗感や、トランスジェンダーやノンバイナリーの当事者の機会に関するルールが整備されていないことなどが挙げられる。２０２２年に実施された国内の調査では『体育の現場は自分らしくいられる場所である』との回答に、ＬＧＢＴＱ＋当事者は非当事者と比較して低い傾向が見られた。また、『体育に参加してポジティブな気持ちになった』との回答にもＬＧＢＴＱ＋当事者は非当事者と比較して、低い回答が得られた。この結果から、ＬＧＢＴＱ＋の人々のセーフ・スペースがスポーツの中で保証されていないのが現状であると考えられる」

▼松宮智生氏

「現在、スポーツにおいて各国際競技団体（ＩＦ）が多様な性に関するルールを作っている最中である。私は今後、男子がオープンカテゴリー化されるのではないかと予想する。また、女子のカテゴリーはスポーツにおける独自の女性になる（シスジェンダーかつテストステロン値も低

いなど）と考える。構造的に性的マイノリティの人を排除するような考えは改めるべきであり、できるだけ多くの人が競技に参加できるようなルールを考えていく必要がある」

▼質疑応答

Q＝石井孝法氏（了徳寺大学）

「性という軸だけではなく、もっと広い視点で共生を考えた時に武道では、どういう教育をするべきなのでしょうか」

A＝野口亜弥氏

「私は現在、同じ空間の中で多様な人たちが異なる仲間と一緒にルールを創って、豊かな環境を作っていくことを実践しています。そうすることで障害の有無や性別などを自分たちで考え、意見交換できていると思います。そのような体験が日本では少ないと感じています」

◇

最後に司会の小田佳子氏が「女性・男性の二項対立に落とし込まず、武道がもっている可能性にもう一度目を向けて、本質を見てどのように社会に発信していくかが大切だと思います」と結んでシンポジウムは終了した。

■表彰式・総会

2日目（5日）午後1時から表彰式と総会が行われた。令和5年度日本武道学会優秀論文賞の表彰では、自然科学系から山本幸紀氏（筑波大学大学院）の「異なる襟幅の柔道衣を用いた少年柔道競技者の背負投動作：柔道における肘関節損傷予防への提案」が選ばれ、大保木輝雄日本武道学会会長から表彰状を受けた。

総会では、大保木会長が「武道9種目の共通項は対面です。本日、対面での開催が素晴らしいことだと改めて認識し、新進気鋭の若い研究者の方の発表に感動しました。発表の中には日本武道学会の新たな可能性の答えがあるのではないかと期待しています。皆さん！　未来に向けて力を発揮してください」と挨拶した。

続いて、電子投稿システムを利用できる「武道学研究」投稿規程の改定など9件の審議事項が承認された。

■研究発表

5分野で計74演題に上った。その一部を紹介する。

▼人文・社会科学系

・佐々木康允氏（富士大学）ほか

「大学生柔道競技者における柔道実践の動機づけの因子構造とその信頼性」

全日本柔道連盟の『公認柔道指導者養成テキスト・C指導員』では、柔道を取り巻く環境は多様化し、多様な価値観を寛容に受け入れる姿勢が強く求められるとされている。多様な価値観を受け入れることを考えたとき、そもそも競技者がなぜ柔道を実践しているのかを考える必要があると考えた。先行研究では、質問事項が限られており全体傾向を把握できず、信頼性や妥当性が確保されていないとの課題が見つかった。

そこで本研究では多様性を数量的に検討するため、自由記述回答で得られた103項目を基に、大学生柔道競技者481名を対象に調査を行い、その因子構造や全体傾向を検討した。

大学生柔道競技者の動機づけの多様性を数量的に検討した結果、大学生柔道競技者の動機づけは目標達成因子、武道としての魅力因子、人間的成長因子、惰性継続因子、柔道指導のキャリア形成因子の5因子40項目からなる事が示唆された。

▼自然科学系

・鈴木浩司氏（日本大学松戸歯学部）ほか

「空手道競技会における救護状況と課題」

本研究では、空手道競技会における外傷様相を示し、課題について検討した。

調査の結果を10年前のデータと比較したところ、外傷傾向は変わらず、鼻・頭部・口腔内・顔面への怪我が多かったが、外傷数は減少傾向にあることがわかった。外傷数が減少した理由としては、ルールの改定や審判技術の向上、拳サポーターの厚みの増加などが考えられる。

競技会の救護は、基本的に市販薬で対応しており、対応できないものは救急搬送または後方支援病院への受診を指示している。その判断が重要になる。迅速な救護に繋げるため、全スタッフがその共通認識を持つ必要がある。

▼武道指導法系

・石井直人氏（秋田工業高等専門学校）ほか

「柔道大内刈りの効果的な掛けの方向」

柔道の大内刈りの効果的な掛けの方向について報告した。被験者は柔道部所属の大学生17名で、柔道歴8

ポスター発表：立礼時の腰部前傾角度を測る佐藤氏

優秀論文賞を受賞した山本氏（右）と大保木会長

年以上の者。掛けの方向は「斜め上方向」、「真後ろ方向」、「斜め下方向」の3通りとした。なお試技は、組みは相四つ、体格が近い被験者の取り・受け・支えの3人一組で行われた。試技終了後、質問紙による調査を行い、三つの掛けの方向について、取り・受け・支えの立場から5段階評価で回答を求めた。その回答を基に平均値の差を比較し、有意差の検定は、分散分析を用いた。

その結果、大内刈りの掛けの方向として「斜め下方向」が最も効果的で、次点が「真後ろ方向」、最も効果的ではなかったのが「斜め上方向」という結果になった。

今回得られた知見は、柔道熟練者だけではなく、柔道初心者や学校教育での大内刈りの練習法・指導法へ示唆を与えるものである。

▼ポスター発表

・佐藤武尊氏（皇學館大学）ほか

「柔道指導者が施す礼法に関する研究：立礼時腰部前傾角度に着目して」

本研究では、柔道の立礼時の腰部前傾角度について、知識として有している角度と実際に立礼を行った際の角度の差を明らかにすることを目的とした。被検者には「あなたの思う正しい柔道の立礼を行ってください」という条件のみを伝えて立礼を行わせ、その様子を撮影した。各指導者が知識として有している柔道の立礼時の腰部前傾角度を立礼時腰部前傾角度（以下、知識前傾角度）として扱った。実際の前傾角度の平均値は、49・6度（±8・9）であり、知識前傾角度と有意な差が認められた。このことから、指導者が礼法の指導をする際に、自身が認識している腰部前傾角度を体現できていない可能性がある事が示唆された。

▼国際セッション

・Shusaku Kiryu（Kodokan）ほか

「Fact-finding study of Kodokan Kohaku-shiai」

講道館紅白試合は、１８８５年頃から講道館で行われてきたといわれ、現在まで130年以上続く乱取の試合である。本研究では、講道館紅白試合を対象とし、乱取試合のシステムが構築されていく過程を明らかにし、柔道の試合の在り方を考える基礎資料作りを目的とした。

講道館では、研修生の増加などの実情に応じて紅白戦が制度化された。嘉納治五郎の死後も、試合開催日数の増加や女子部門の創設など、練習生に出場機会を与える措置が講じられた。一般の人も紅白戦を観戦できたことは、柔道が社会的認知を得る上で大きな役割を果たしたことを物語っている。

■専門分科会

各道の内容は次の通り。

▼剣道

関伸夫氏（スポーツ庁政策課教科調査官）が、「学校体育における武道授業の一層の充実に向けて」と題した講演を行った。

現在の学習指導要領では、育成を目指すための資質・能力の三つの柱として、知識・技能（何を理解しているのか、何ができるのか）、思考力・判断力・表現力等（理解していること・できることをどう使うか）、学びに向かう力・人間性（どのように社会・世界と関わり、より良い人生を送るか）が挙げられています。大切なのは、体育だけでなく全ての教科で三つの資質・能力を身につけさせるということです。つまり、保健体育、さらには武道で目指す三つ

なぎなたと合同で行われた弓道専門分科会

剣道専門分科会で講演を行う関スポーツ庁政策課教科調査官

の柱を教員が理解し、指導しないといけないということです。

その中で知識では、ただ教えるだけでなく考えるもととなることを具体的に教えること、技能では、その固有の動きを教えることで楽しさを味わうことがそれぞれ大切です。学びに向かう力・人間性では、他の教科では実は何を教えるのかは示されていません。体育のみが愛好的な態度、公正、協力、責任、参画、共生など、具体的な指導事項を示しています。武道では、相手を尊重し伝統的な行動の仕方を守ろうとすることが明記されており、この部分は他の体育の領域にはありません。また、実際の授業場面では、主体的・対話的で深い学びの視点がある授業が大切です。

武道授業の一層の充実に向けて、大切なことが三つあると思います。一つ目は、技能だけでなく三つの柱をバランスよく指導することです。それにはしっかりと単元をデザインしないといけません。二つ目は、武道特有の指導内容を確実に指導することです。武道は他の領域と異なり、相手と直接向き合う対人競技です。武道の場合、そこを指導することが重要です。また、武道で相手を尊重する形の表現方法が礼であると指導すれば、他の場面でもそれが生かされます。学校で学んだことは生活で役立つものでなければいけません。三つ目は、武道領域の楽しさを味わえる指導をし、生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現に繋がる可能性を高めることです。

ある研究論文※によると、中学校武道必修化前と後では、後に受講した者の方が、高い学習成果が示唆されています。成果は確実に出ているのです。それは、これまでさまざまな研究者の方から、用具を工夫するなどの武道授業の指導方法、授業づくりが開発され、紹介されていることに起因します。それはとても重要なことですし、これからもそれを継続していかねばなりません。

※関仲夫ほか：「中学校武道授業の必修化前後における学習成果の変化」『体育学研究』、68：409―423ページ、2023年。

▼弓道・なぎなた

弓道となぎなたの専門分科会は「中学校体育における武道授業の実際：授業採択に係る問題は解決できるのか」と題して合同で開催された。

五賀友継氏（国際武道大学）は「近代学校教育における弓道・薙刀授業」について発表した。

現在、武道必修化における弓道・なぎなたの実施率は、弓道23校（0・3％）、なぎなた57校（0・8％）と低い。一般には特別な種目であるため、一部地域に偏在していることや指導者不足・ノウハウ不足が課題として挙げられる。歴史を遡ると現在と同じ問題点が挙げられ、歴史は繰り返されていることがわかった。近代において弓道・薙刀の課題は、①理論化②教材研究③政治力④指導者養成であるとされ、これらの課題を解決しない限り、現在でも授業として弓道・なぎなたを実施するのは難しいと結論づけた。

続いて、今浦千信氏（全日本なぎなた連盟）が「なぎなた授業の現状報告」について発表した。今後の課題として、なぎなたの魅力の発信、授業協力者の要請、指導から評価まで体育教師が行える指導書の作成、講習会の実施が挙がった。

▼少林寺拳法

オンライン形式で実施され、初めに総会が行われ、三つの議案が承

認・可決された。

次に少林寺拳法連盟の宗昂馬（こうま）会長が「可能性の種子」と題して講演を行った。「自分の環境は栄養だと思います。厳しい環境がないと人は育ちません。私が求めているのは成功者でなくて成長者です。本当にすごい人は自分が好きなことを自分らしく突き進める人。そういった情熱、志がある人、無限の可能性の種子を育てていきたいと思います」

続いて、高坂正治氏（国際武道大学）司会のもと、「武道授業を起点とした少林寺拳法の教育と普及について」をテーマとしたシンポジウムが、牧野英一氏（練馬区立開進第二中学校校長）、中島正樹氏（富士見丘中学高校）と秋元宏介氏（少林寺拳法連盟）が登壇して開催された。牧野氏からは、「生きる力」を育む武道授業を起点として、教室、部活動や道場での学びにも活用できるようなプログラムを開発・試行したことが説明された。

初めて開催された少林寺拳法専門分科会

最後に、藤原豊樹氏（東京理科大学）と新名主公哉氏（鹿児島県少林寺拳法連盟）から研究発表と実践報告が行われた。

▼障害者武道

松井完太郎氏（国際武道大学）と大橋正康氏（障害者武道協会）が「新たな武道稽古手法：コロナ禍で総ての人々に行動制限（障害）があったときに得た新たな武道稽古手法の価値」をテーマにシンポジウムを行った。シンポジウムではオンラインでの稽古法など九つの事例を紹介。オンラインでの代替手段の普及は、障害者の方々に大きな転機をもたらした。また、離島在住者などもオンライン形式の大会に現地から参加できるなど、その恩恵は障害者だけではなく健常者にも大きな影響を及ぼした。オンラインでの稽古法は今後も高度な技術のもと、提供されていくと結論づけた。

障害者武道専門分科会

▼空手道

「学校空手道の推進と空手道全国大会の挑戦的企画」をテーマに、先ず小山正辰氏（全日本空手道連盟）が「学校武道推進委員会のこれまでとこれから」について講演した。

次に、岡﨑紀創氏（全日本空手道連盟）が「全国大会の同一会場での連続開催における成果と課題―空手WEEK2023を事例として―」について説明した。

空手道専門分科会

空手WEEK2023とは、全日本少年少女大会、全国中学生大会、全日本パラ競技大会、全日本体重別大会の4大会を7日間で連続的に同じ会場で行う初めての試みであった。これまで交わることのなかった、小学生・中学生・パラ競技者・国内トップ選手の繋がりや、会場周辺の商店街・信用金庫・中学校との地域連携、パラ空手体験会・体力測定会・環境保護のワークショップなどの空手以外の学びの提供など、多数の新たな試みを取り入れた。

出場者数は4大会で3865名、来場者数は延べ1万1000名であった。大会の様子を収めたユーチューブの再生回数は計107万回となり注目度の高い取り組みとなった。

※柔道は専門分科会を実施せず。

一般研究発表　演題・発表者抄録掲載一覧①

自然科学系

演　題	発表者	所　属
空手道競技会における救護状況と課題	鈴木　浩司	日本大学松戸歯学部
剣道稽古中のマスク着用は生理学的負担になるのか	高橋健太郎	
剣道選手におけるプライオメトリクスが跳躍能力および面打ちに及ぼす効果	佐々木陽一朗	
“なぎなた”の運動習慣が中高齢者の健康度・生活習慣に与える影響	田中ひかる	近畿大学
「コンタクトスポーツ難聴」予防のための頭部衝撃低減サポーターの開発	濱西　伸治	東北学院大学
大学剣道選手におけるアキレス腱の特性の左右差とジャンプパフォーマンスとの関連について	岩本　寧々	筑波大学大学院
剣道試合の Time-motion 分析：簡便ゲーム分析における移動測定の信頼性の検証	川井　良介	日本大学文理学部
韓国における剣道の映像判定システムについて	金　　明燮	早稲田大学
ゴールデンスコア導入後の全日本柔道選手権大会の競技分析	三宅　恵介	中京大学
大学女子柔道選手における競技力向上のためのコンディショニングサポート～ウエイトトレーニングに着目して～	清水　伸子	国際武道大学
大学柔道競技者の異なる稽古順がもたらす神経内分泌反応：テストステロンとオキシトシンからみた精力善用・自他共栄	松井　　崇	筑波大学体育系
柔道練習時の発汗量と水分摂取量の関係	市川龍之介	東海大学体育学研究科

武道指導法系

演　題	発表者	所　属
柔道の頭部外傷を予防する大外刈に代わる大外落の検討	林　　弘典	びわこ成蹊スポーツ大学
柔道療育における身体、精神、社会的効果に関する質的研究 ：保護者を対象として	小崎　亮輔	鹿屋体育大学
柔道初心者の頭部外傷を予防する後ろ受け身の効果的な指導法の検討	生田　秀和	大阪体育大学
柔道大内刈りの効果的な掛けの方向	石井　直人	秋田工業高等専門学校
中学校保健体育科における武道領域のこれからの可能性について	太田　順康	大阪教育大学
中学校なぎなた授業に関する研究 ―体育教師のなぎなたイメージに焦点をあてて―	今浦　千信	摂南大学
「剣道における指導法に関する事例研究」 ～自己観察と他者観察を通して～	米山　哲弘	早稲田大学
1 年間のなぎなた授業を通して感じた、最も強い「構え」について	木村　有里	天道流
高次脳機能障害者への剣道指導を通して見える武道の可能性 ～競争社会から共創社会へ～　その６　心理面に焦点をあてて	東山　明子	大阪商業大学

一般研究発表　演題・発表者抄録掲載一覧②

人文・社会科学系

演　題	発表者	所　属
2022年スペシャルオリンピックス日本夏季ナショナルゲーム・広島第1回柔道競技会の構造分析	中村　和裕	福山大学
大学生柔道競技者における柔道実践の動機づけの因子構造とその信頼性	佐々木康允	富士大学
ドイツにおける柔道教育に見られる柔道技法の捉え方： 柔道専門コーディネーショントレーニングの分析を中心に	SORI DOVAL MAJA	津田塾大学
東欧における武道の教育力に関する研究 ールーマニアの武道実践者を対象としてー	柴田　直生	筑波大学大学院
中国における柔道の研究動向と史料分析	劉　　暢	国際武道大学
ドイツにおける生涯スポーツとしての柔道の取り組み ～ドイツ柔道フェスティバルの視察から～	曽我部晋哉	甲南大学
藤田西湖文庫所蔵伝書『大東流合気柔術』（江戸期）の検証	工藤　龍太	早稲田大学スポーツ科学学術院
『新陰流兵法書』を中心とした江戸柳生初期組太刀仕様の研究	中嶋　哲也	茨城大学
新当流における「気」に関する研究ー『兵法自観照』に着目してー	森山　竜成	筑波大学大学院
小学校低学年児を対象とした嘉納柔道思想教育の試み	稲川　郁子	日本体育大学
精力善用国民体育の教育的効果とは何か	大辻　新恭	関西大学大学院
明治期前半における武道教育に関する研究 ー教育雑誌に着目してー	幕田　　熙	筑波大学大学院
大和から伝わる琉球の鎌術（鎌之手　カマヌティー）	早坂　義文	古武道研究会
安政年間における槍術修行記録について	長尾　　進	明治大学
島村右馬丞の日記にみる幕末土佐藩の居合について	森本　邦生	貫汪館
大日本武徳会における武道教育に関する研究 ー設立当初に着目してー	筒井　雄大	国際武道大学
剣道の竹刀操作に関する史的考察	坂本　太一	中部学院大学
大日本武徳会武徳祭大演武会に関する新史料の発見とその意義： 剣道史研究の視点から	矢野　裕介	愛知淑徳大学
武道実践者の礼儀に関する研究　ー大学剣道及び柔道部員と一般学生の挨拶に関するアンケート調査よりー	中山　佳子	早稲田大学大学院
弓術流派日置流印西派「秘歌」について	黒須　　憲	東北学院大学
弓道稽古着の普及と定着に関する考察	松尾　牧則	筑波大学

一般研究発表　演題・発表者抄録掲載一覧③

ポスター発表

演　題	発表者	所　属
学生柔道選手における競技力と Grade Point Average および知能指数の関係	高野　　当	皇學館大学
OpenPose を活用した投の形の動作評価システムの開発	横山　喬之	摂南大学
UK 法から考える勝利達成条件　－柔道競技の場合－	内村　直也	大阪産業大学
大学男子柔道選手におけるジャンプ能力と競技力の関係 －片脚 4 方向ジャンプとバーティカルジャンプに着目して－	石橋　剛士	熊本学園大学
血流制限下におけるトレーニングが血中酸素飽和度に与える影響 －大学男子柔道選手を対象として－	大川　康隆	東海大学
世代別による柔道の必要性の調査	吉田　　岳	東海大学大学院体育学研究科
デジタル技術を用いた武道史研究：『校友會雑誌』の計量テキスト分析	佐藤　皓也	順天堂大学
一刀流中西派の組太刀遣方について －中西派聞書と思われる資料から－	立木　幸敏	国際武道大学
高齢者の柔道教室参加による柔道への印象の変化に関する検証	大村　康太	東海大学大学院体育学研究科
中学校武道授業の学習成果に関する検討 －保健体育科教員養成課程学生に対する回顧的調査から－	京林由季子	岡山県立大学
柔道授業における「自由練習」の有無が生徒の学習成果に及ぼす影響　～「伝統的な考え方」に迫る安全な授業展開を目指して～	由留木俊之	岸和田市立山直中学校
柔道指導者が施す礼法に関する研究：立礼時腰部前傾角度に着目して	佐藤　武尊	皇學館大学
大学柔道選手が指導者から受ける非言語的行動の印象と頻度に関する調査	熊代　佑輔	国際武道大学
剣道を通した大学生の社会貢献活動について －少年剣道指導の実践報告－	山田　彩結	大阪教育大学
英国及び米国の剣道実践者による稽古環境のサーフェイスに関する評価	池田　孝博	福岡県立大学

一般研究発表　演題・発表者抄録掲載一覧④

国際セッション <Video Presentation>

演　題	発表者	所　属
Biomechanical investigation of technical parameters indicating the skill level of Seoi-nage in the Kake phase	Takanori Ishii	Ryotokuji University
A monitoring head impact exposure in women's judo athletes: A single site study	Sentaro Koshida	Ryotokuji University
Grasp and Breaking Grasp Strengths of Judo Versus Non-Judo Athletes	Chinami Nakagawara	Waseda University
The effect of ambidextrous development on fencing performance in the early training phase of a sabreur practising the Old Polish martial art Signum Polonicum	Leonard Marynowski	Signum Polonicum Wrocław
Cutting-edge Developments and Challenges in Artificial Intelligence for Enhancing Martial Arts Sports Performance	ning Li	MARA University of Technology
Seni Silat Malaysia Curriculum: The arts of silat combat in Tempur Seni	Mohamad Nizam MOHAMED SHAPIE	University Technology MARA (UiTM)
The impact of the study of selected Aikido techniques on the performance in wrestling exercises applied in the Old Polish martial art Signum Polonicum	Kornel Kalka	Signum Polonicum Wrocław
Differentiation and Analysis of Four Theories on the Origin of Karate	yi Gao	Southwest University
Fact-finding study of Kodokan Kohaku-shiai	Shusaku Kiryu	(Kodokan)
The Influence of Taijiquan Training on the Physical Function of College Students	LIU CHANG	MARA University of Technology
A lance, a saber, a pistol - the offensive weapon of the Polish hussars and the art of using it in the years 1498-1786(93)	Jakub Pokojski	Signum Polonicum Katowice
Discovering the tradition of Polish martial art	Miłosz Markiewicz	Signum Polonicum Wrocław
SAN CHIN KATA HISTORY, EVOLUTION AND BUNKAI	Edvard Sefer	IMACSSS
Research on the International Communication Strategies of Wushu Culture from the Perspective of Globalization	Nasru Syazwan Nawai	University Technology MARA (UiTM)
Maritime martial arts-the rise and fall of Wenzhou Nanquan	Wenyao Chen	University of Technology MARA
The Tasks and Outcomes in Karate Classes: A Survey of Junior High School Students	Kaori Inoshita	Reitaku University
A study of Kendo Shinpan Method with one-arm II　-Focusing on the Diversity of Budo and Lifelong-kendo-	Yoshiko Oda	Hosei University